2118　離島覚書（長崎県・宇久島）

「フェリー・いのり」から宇久島を望む

令和３年 11 月 18 日

平家盛

寺島から宇久島の神浦（こうのうら）漁港に戻り、同島の中心地である平に向かう。

フェリーターミナルの前には盛洲公園が整備され、平家盛の像が置かれていた。家盛は平忠盛の子、清盛の弟にあたる人物とされ、1187（文治２）年に漂流中の家盛一行を島の海士が救助して迎え入れたという伝説が残ることから、地元では宇久島を「平家ゆかりの地」として盛んに宣伝している。島の玄関口に置かれたこの像はまさに平家の島をアピールするものだ。

家盛の子孫は宇久氏を名乗り、７代にわたって宇久島を統治、その後、福江島に移って五島氏に改名し、五島列島一円を支配した。つまり平家盛は五島氏（五島藩）の始祖といえる人物なのである。

ただ、宮本常一は家盛を平家とする説に異を唱え、「おそらく、宇久氏は松浦氏の一族でありつつ、早く独立して宇久島をその領有とし、小さいながら島帝国をつくりあげていたのではないかと思う」としている。全国には平家伝説の島や集落が多いが、安易に平家と結びつけるのは考えものである。

五島とは、南から福江島、久賀島（ひさかじま）、奈留島、若松島、中通島の５つの大きな島を指す。中世以降、最も北の宇久島の領有から始まり、その後、より広い平らな土地を求めて福江島に移動したことから、五島列島は北の宇久島から開けていったのは間違いないにもかかわらず、狭義の五島列島に北の２島は含まれない。両島は平戸や佐世保との縁が深かったからなのだろうが、なぜ北の２つの島が別扱いされたのか不思議である。

平漁港の周辺は戦後埋め立てられて広い用地ができているが、「宇久町郷土史」に載って

いる昭和 20 年代の浜の写真を見ると、現在の港一帯は広い砂浜で、その背後に集落が形成されている。当時は桟橋もなく、船は砂浜に引き揚げられていたのである。1955（昭和 30）年 12 月に第４種漁港に指定され、以後漁港整備が進められた。

現在、本土と宇久島は２つの航路で結ばれている。一つは佐世保～小値賀島～宇久島のルートで九州商船㈱のフェリーが１日２便、高速船が１日３便就航している。もう一つが博多～宇久島のルートで、野母商船㈱のフェリーが１日１便就航している。このフェリーは五島列島の島々を経由して、福江島まで行く。

宇久フェリーターミナル（左）、ターミナル前に置かれた平家盛の像（右）

行政センター

宇久島に来るのは 2011 年 7 月以来 10 年ぶり、２回目である。この時はマウンド魚礁の利用実態を把握するため、一本釣の漁師２人に聞き取り調査を行った。

港の中央付近にある行政センターに行く。もとの宇久町役場で、合併後、佐世保市の出先となった。センターで字別人口と世帯数のデータをもらう。また、管内図を 500 円で購入し、さらに島の産業（農業と水産業）について話を聞いた。佐世保市との合併で宇久町は閉町となったため、旧宇久町は「閉町記念誌」を 2006 年３月に発刊しており、在庫があったのでこれもいただく。

宇久島は 1889（明治 22）年の町村制施行時は北松浦郡平村と神浦村の２村で構成されていた。この２つの村の成り立ちは江戸時代にさかのぼる。五島藩は 1655（明暦元）年に藩主盛次の死後、年少であった嫡子の盛勝が五島家を相続するが、分知を願い出ていた盛清に分離独立が認められ、五島藩の総知行高の 1/5 を給されて、1661（寛文元）年に富江藩が発足した。これに伴い、宇久島の南西部の３村、小浜、神浦、飯良は富江藩になり、残りが五島藩として残り、島に２つの藩が存在することになったのである。

こうした江戸時代の行政区分がそのまま踏襲され、五島藩は平村、富江藩は神浦村になった。その後、1949（昭和 24）年に平村は平町として町制を施行、1955（昭和 30）年に平町と神浦村が対等合併して宇久町となり、ようやく１島１町が実現した。50 年ほど１島１町の時代が続くが、2005（平成 13）年に本土側の小佐々町とともに佐世保市に編入され、現在は佐世保市宇久町となっている。ちなみに隣の小値賀島は合併に加わらなかった。

宇久島は面積 24.94 ㎞^{2}、周囲 37.7 ㎞の比較的平坦な島で、島のほぼ中央部に標高 259m の城ケ岳がそびえる。

2015 年国勢調査時の人口は 2,179 人、世帯数は 1,183 戸であった。戦前はほぼ１万人前後で推移し、戦後は 1955 年の 11,684 人（2,422 戸）をピークに減少の一途を辿ってきた。戦後のピーク時に比べると、人口は約 1/5、世帯数は約半分に減少している。

島内の集落は、旧平町の中心地である平と太田江、野方、木場（こば）、大久保の５つの郷、旧神浦村は中心地の神浦と飯良（いいら）、本飯良、小浜の４つの郷で構成される。人口は平郷に集中し、2021 年度末現在では島の人口の６割強を占めていた。９つの郷のうち、太田江、野方、木場、大久保の北部集落は内陸部に位置し、農業を主産業としてきた。

行政センターから宇久小学校脇に置かれている公民館に行き、図書室で郷土資料を閲覧する。「宇久郷土誌」と香月洋一郎（2009）著「海士のむらの夏－素潜り漁の民俗誌－」（雄山閣 290pp）（宇久の海士の記録）をみる。

昼になったので、港を見下ろす高台にあるシーサイドホテル藤蔵の食堂に行ったが、あいにく宿泊客が多く、この日は昼食を提供していないとのことで断念。平漁港に下って、「あられ茶屋」という店に入り、カレーライスを食べた。昼食後公民館に戻り、必要箇所のコピーを頼むつもりだったが、宇久郷土誌は 2,000 円で販売しているというので、１冊購入した。島から戻って自宅で確認すると、この宇久郷土誌があった。以前買っていたのだ。

平港、黄色の建物が行政センター（旧町役場）（左）、平の町並み（右）

宇久小値賀漁協宇久支所

公民館から再び平漁港に下り、港の東はずれにある漁協を訪ねた。

戦後制定された水産業協同組合法のもとで、宇久島には、平漁協、神浦漁協、西部漁協、そして寺島に寺島漁協が設立される。しかし小規模な漁協が乱立していたため、1957（昭和 32）年に西部漁協と神浦漁協、1959（昭和 34）年に寺島漁協と神浦漁協が合併、さらに 1995（平成７）年には神浦漁協と平漁協が合併して宇久漁協が誕生、１島１漁協となった。

その後も組合員と水揚高の減少が続いたため、2006（平成 18）年 10 月には隣の小値賀漁協と合併し、宇久小値賀漁協となり、本所が小値賀島に置かれた。したがって宇久島の漁協は現在、同漁協の宇久支所という位置づけになっている。

合併によって職員を減らし、スリム化している影響と思われるが、職員は荷捌き場で忙しく働き、事務所には職員は１人しかいなかった。その男性も仕事に忙しいようで、仕事の合間を利用して手短に話を聞く。

宇久島の組合員（寺島を除く）は表１に示すように、正が 37 人、准が 116 人、の合計 153

人である。地区別では平漁港のある平郷が最も多く、これに神浦郷が続く。10 年前に調査した時の正組合員数は 70 人だったので、この間に半減した。かわりに准組合員が 36 人増えている。おそらく高齢化とともに出漁日数が減り、准に格下げになったのだろう。なお 2018 年漁業センサス時の漁業就業者数は 62 人で、このうち 45 歳未満はゼロ、高齢化率は 75%を超えていた。現在はおそらく 50 歳未満の漁業者はゼロ、高齢化率は８割を超えているだろう。宇久島の漁業は存亡の危機に立たされていると言っても過言ではない。

島の北側に野方漁港（第１種）と木場漁港（第１種）の２漁港、南側には平漁港の他に小浜漁港（第１種）、神浦漁港（第２種）、古里漁港（第１種）の３漁港が整備されており、島内には合計６つの漁港がある。

表１　地区別の組合員数

		正	准	合計
旧平町	平郷	21	37	58
	野方郷	7	2	9
	太田江郷	1	1	2
	木場郷	1	1	2
	大久保郷	0	7	7
旧神浦村	小浜郷	1	19	20
	神浦郷	5	36	41
	飯良郷	1	13	14
合計		37	116	153

宇久島で営まれている漁業は、一本釣、ヨコワ曳釣、延縄、刺網、タチウオ孤疑（こぎ）、採貝、採藻などである。直近１年間の総水揚金額は 1.3 億円であった。2007 年度には 3.8 億円であったから当時と比べると 1/3 になっている。この 10 年間、生産額は年々減少してきた。

一本釣はイサキをメインにヒラス、サワラ、ブリなどが漁獲対象である。イサキは、春季（３～５月）は昼釣り、夏季（６～10 月）には夜釣り（19 時から夜明け）にかわる。宇久小値賀漁協では、イサキに「値賀咲（ちがさき）」というブランドをつけ、販売に力を入れてきたが、最近は不漁が続いているようだ。

ヨコワ曳釣りは一本釣の漁師が 11 月～４月の冬季に操業する。漁場は対馬から下五島、東側は山口県に至る広範囲で、釣ったヨコワ（クロマグロの幼魚）は漁場の近くの漁港に水揚げる。

延縄はレンコダイやアマダイを獲る伝統的漁業で、神浦を中心にさかんであったが、近年は操業する人が少なくなっている。

タチウオ孤疑は、２～３kg の鉛の分銅をつけた主糸に 30 本ほどの枝針を４～５m間隔で取り付けた延縄状の糸を取り付け、曳きながら釣る。針にはワームを巻きそこに餌を付ける。水深は 100m前後の層をゆっくりと曳航する。宇久小値賀漁協では、このタチウオに「白銀」というブランドをつけている。

採貝の対象はアワビとサザエであり、アワビは重要な漁獲物であった。藩政時代から「明鮑」に加工され、「長崎俵物」として中国に輸出されていた。五島藩は宇久島の海士に五島諸島一円のアワビを採取する特権を与えていたから、宇久の海士は五島諸島の沿岸に遠征して、アワビを獲った。

戦後のアワビの水揚高のピークは 1984（昭和 59）年の 30.6 トンで、当時の生産額は約１億円であった。金額ベースでは 1990（平成２）年の 25 トン、1.64 億円がピークであった。しかしこのアワビも現在はほとんど獲れなくなっている。一方、サザエの資源も豊富で、当時は見向きもされない状況であった（戦後はサザエを缶詰にしており、その工場が宮崎缶詰製造所跡として残っている）。しかし、現在は年間１トンほどの水揚げしかなく、以前１人が１日に獲った量を、全員が１年かけて獲っている感じだという。

採藻では、テングサ、オゴノリ、ヒジキ、ワカメ、トサカノリなどを採っていたが、近年の水温上昇でさっぱり育たなくなり、魚による食害も大きい。ワカメもヒジキも獲れなくなり、わずかにテングサが採れているだけだ。トサカノリは自家消費程度にすぎない。

宇久小値賀漁協・宇久支所の建物（左）、旧宮崎缶詰製造所跡（右）

東部海岸

漁協で話を聞いてから反時計回りに島を一周する。島を周回する道路（県道 160 号・宇久島巡環線）は海岸線からだいぶ内陸に入ったところにあり、ちょうど城ケ岳を中心にその麓を周回している。県道 160 号を基本にところどころで海の方向に行っては戻りながらドライブした。

漁協から海岸沿いの道を行くと、「浜方ふれあい館」があった。戦後建てられた旧宮崎缶詰製造所跡を改装した海士と捕鯨に関する民間の資料館である。役場で事前に見学を申し入れたのだが、あいにく担当者が不在ということで、観ることができなかった。

集落が途切れた先に墓地があった。墓石は海を向いている。宮本常一によると、宇久島で一般民衆が墓をたてるのは江戸時代後期に入ってからのようだ。宇久氏 19 代の宇久純堯（すみたか）は 1567（永禄 10）年に洗礼を受け、五島列島全体にキリシタンが広まった結果、仏教的色彩のものは全て破壊されたという。墓はつくらず死体は村はずれの砂丘に埋め、その上に「タマヤ」と称するお堂を建てたそうだ。

少し海岸沿いの道を走ると、スゲ浜海水浴場が現れた。ここは漁港海岸に分類され平漁港海岸環境整備事業により 1991（平成３）年度から整備されたようだ。美しい海岸に椰子のような木が植栽されて、階段護岸も整備されている。しかし最近の台風でこの護岸は大きく崩壊し、いまだ復旧していなかった。

その先の長崎鼻に至る海岸線は「シーサイドロード」と命名され、サイクリングロードになっている。長崎鼻の一帯は一面草原で、牛の放牧場になっているようだ。この低い丘陵地

では縄文から古墳時代にかけての遺跡が数多く発掘されている。周囲にはまったく人家はないが、途中の海岸沿いに斜路がつくられていて、ボートが２隻陸揚げされていた。その先に、大浜海水浴場が見える。

砂浜を除く海岸線は溶岩の流れた跡のようで、ごつごつした岩が連なる。海には海藻は全く見られず、透明度が高い。青くて美しい海は沖縄の海ではないかと錯覚させる。

古志岐神社の脇を通って県道 160 号に出る。道路脇で遺跡の発掘作業が行われていた。

スゲ浜海水浴場（左）、長崎鼻草原と大浜海水浴場（右）

北部海岸

160 号を北上し、途中から県道を離れて対馬瀬灯台に向かう。途中に棚田がいくつもあり、枯れ草を野焼きにしている人がいた。

宇久島の最北端が対馬瀬灯台である。風が強いためか、あるいは牛を放牧しているためか木は一本もなく、草原が続く。灯台の前には対馬瀬と呼ばれる瀬があり、周辺には岩礁が連なる。磯釣りには絶好の場所らしく、釣り客がかなりいた。灯台の西側に野方漁港が整備されているようだが、道がよくわからず行くのを断念する。

東部海岸は小さな湾曲した地形に砂浜が形成されているが、北部海岸は断崖絶壁が続く。

灯台から野方郷の集落に入り、三浦湾に向かう。途中、「ヒゴタイの里」と書かれた看板が立っていた。ヒゴタイは絶滅危惧種に指定されている植物で、宇久島では唯一この周辺に自生する。坂を下った先は三浦湾だ。三浦湾は小さな河川の河口に開かれた入り江で、奥の方は木場漁港の三浦地区となっていて、漁船が５～６隻係留されていた。

対馬瀬灯台（左）、木場漁港（右）

三浦湾の北側に三浦神社が置かれている。鳥居の両脇に高さ５m以上はあると思われるソテツの大木が何本も生えていた。このソテツは長崎県の天然記念物に指定されている。

再び県道に戻り、城ケ岳に登る。山を降りて木場の集落から急斜面を下り、木場漁港を見に行った。漁港には船は１隻も係留されておらず、ボートが２隻陸揚げされているだけで、あまり利用されているとは言い難い。

城ケ岳展望台

城ケ岳は宇久島のほぼ中央に位置する鐘状火山である。２つの山頂と両頂を結ぶ尾根が頂上付近を構成している。160 号線から展望台下の駐車場まで、舗装された道路が整備されているので、車で楽に登れる。

展望台の場所は、戦時中、旧海軍の特設見張所が置かれていた。岩山を２mほど削って平らにし、基地がつくられた。この基地建設には島内の小中学生が勤労動員されている。山頂には電波探知機、監視哨、高射機関銃、探照灯などが整備され、山麓には兵舎、無線室、発電所などの基地が建設された。時間を少し前に戻すと、江戸時代には遠見番所も置かれていた。中世には山城が置かれ、現在でもその跡が残る。

車を駐車場に置き、展望台に登る。島の南側がよく見え、小値賀島をはじめ野崎島、中通島などの五島列島が眺望された。城ケ岳はタブ・シイで覆われた照葉樹林であり、島の水源地になっている。

城ケ岳（左）、展望台より寺島、小値賀島を望む（右）

肉牛の繁殖

島を走っていて目につくのは黒牛である。牛舎はいくつも見かけたし、餌を生産する草地も多い。草地の脇や牛舎の近くには牧草ロールが積まれている。

今年の６月１日現在の牛飼養農家数は 73 戸で、1,189 頭の親牛が飼われていた。島ではもっぱら繁殖を専門とし、肥育農家はない。年間の出荷頭数は約 1,000 頭である。１頭の平均販売額は約 70 万円なので、年間の出荷額は７億円ほどだ。つまり農家１戸あたりの単純平均出荷額は約 1,000 万円になる。かつて宇久島は漁業が基幹産業であったが、上述したように漁業生産額は大幅に低下しているので、すでに畜産業が水産業を凌駕して久しい。

宇久島における牛飼いの歴史は古い。もともと使役動物として繁殖・肥育していたから牛を飼う技術を持っていた。昭和 50 年代前半までの飼養方法は、戦前と同じく春から秋にか

けて共有の牧草地に放牧し、冬季は舎飼い。草以外の飼料は、甘藷蔓、大豆莢穀、稲藁等の副産物利用が主体であった。1980 年代になり、耕耘機やトラックターなどが導入され農業の機械化が進むと、使役動物としての牛は不要になる。代わって肉牛の生産に転換した。当初は繁殖から肥育まで手がけていたが、1990 年代からは繁殖が中心となった。

使役用の牛を飼っていた 1966（昭和 41）年当時、飼養農家は 821 戸、飼養頭数は 1,019 頭だったから 1 戸の農家で 1 頭～２頭を飼養していた。その後、肉牛の繁殖に切り替わると、2000（平成 12）年には 202 戸、1,388 頭と規模拡大が進み、多頭飼養の農家も増えて 10 頭以上を飼養する農家は 38 戸になった。現在はさらに多頭化が進んでいる。

戦前の宇久島の農業は、他の多くの島と同様、麦と甘藷が中心で、米も作られていた。自給用の米は栽培面積を減らしながら現在も作られているが、現金収入源は肉牛の繁殖に大きく依存している。

牛舎で飼われている黒牛（左）、牛舎脇に積まれた牧草ロール（右）

古里漁港

県道 160 号を通り、木場から大久保の集落を経て、本飯良郷に入った。

八幡神社の周辺は、比較的まとまった広い田んぼがみられるが、地形からみて干拓地と思われる。この田んぼに水を供給する宮の首川という用水路にはホタルが生息しているようで、「ホタルをみんなで育てましょう」と書かれた看板が立っていた。

干拓地の東側の古里漁港に行った。漁港の背後に本飯良の集落が形成されている。漁港には 10 隻ほどの漁船が係留されていた。

ちょうどキジハタを釣ってきた漁師がいたので、話を聞く。彼は古賀勇吉さんといい、現役のタグボートの船乗りである。普段は大阪から鹿児島まで西日本各地を仕事場にしている。仕事柄、年に４回長期の休暇があり、そのたびに宇久島に里帰りして魚釣りをしているようだ。生家は八幡神社の鳥居の隣だという。これからミズイカの夜釣りに出かけると言っていた。

古賀さんが子供のころの 35 年ほど前はこの地区でも漁業がさかんで、ブリやヒラマサの曳釣り、マダイやレンコダイの延縄、イカ釣り、アワビの海士漁がメインだったという。特に隣の神浦は延縄の盛んな土地で、広島県豊島の家船（えふね）も来ていたそうだ。彼はけっこう民俗学にも興味を持っているようで、宮本常一のファンだといい、著書もいろいろ読んでいるみたいだった。

干拓地のような地形の田んぼ（左）、古里漁港（右）

火焚岬

古里漁港から厄神社を経て、宇久島の東端、火焚崎（ひたきざき）に出た。ここは例の平家盛の上陸地とされるところで、沖に小さな島が並び、その内側は如何にも船を隠すには適した土地のように見える。船隠しの物語をつくるにはふさわしい地形条件を備えたところで、「家盛上陸の地」と書かれた石塔が建っていた。

その近くに「祈りの岬」と書かれた洋式の鐘が吊るされていた。鐘の上には「力」という文字が掲げられている。古里漁港でお会いした古賀勇吉さんがお父さんの古賀力さんを供養するためにつくったもので、「力の鐘、力の輪」と書かれていた。何でも力さんは「世界の平和、西海の航海安全、漁民の豊漁、夢をもて」と願っていたといい、その願いを込めたものだ。力さんの命日の８月７日には力と書かれた文字と夕日が重なるという凝りようである。今年の命日につくられた真新しいものだった。勇吉さんから「鐘を叩いていってくれ」と頼まれていたので一つ叩いた。

この一帯は広い草原となっていて林はない。正式なゴルフ場ではないが、９ホールのゴルフコースが設けられている。平原ゴルフ場と呼ぶが、もちろんクラブハウスなどない。宇久町誌には、「この土地は高麗芝の原種である姫芝で覆われていて、1977（昭和 52）年まで本州方面のゴルフ場に出荷していた」と書いてある。

10 年前にここを訪れた時は壊れた風力発電の風車の残骸が１基放置されていたが、それはすでに撤去されていた。

祈りの岬の鐘と平家盛上陸地の石塔（左）、船隠しとされる場所（右）

ゴルフ場の脇を通り、鹿神社のある大久保郷の集落に出て、160 号線を一路、本日の宿である藤屋旅館に向かった。

藤屋旅館

日没の少し前、17 時ごろに宿に着いた。車を海岸沿いの道路とは反対側の路地に回し、宿の駐車場に停める。藤屋旅館は 10 年前に来た時も泊まっている。海の見える道路側の洋室に案内された。たしか以前泊まった時もこの部屋であったと思う。新型コロナが下火になってきたこともあり、宿には顧客が多く、何れも仕事の関係者のようだった。

2020（令和２）年の観光入込客数は 1.24 万人で、日帰りは難しいことから大半が島に泊まる。宿泊需要はそれなりに多いので、宇久島には富屋旅館を含め、旅館・ホテルが４軒、民宿が３軒ある。この他に最近、「Ebisu home」という素泊まりの宿が令和２年にリニューアルオープンしている。これらの宿泊施設は港を取り囲むように海岸沿いに分布している。この他にも一般の民家を利用した民泊もある。

１階にある比較的大きな風呂に入り、座敷で夕食を食べる。ヒラマサの刺身、トコブシの煮つけ、カマスの塩焼き、ケンサキイカの煮つけとエビの塩焼きがでた。エビ以外は島で獲れたものだろう。トコブシは珍しいので輸入品ではないかと疑って確認したところ、島産に間違いないとのことだった。

今回の島旅は腰痛に悩まされていた。立ったり座ったりする分には特に問題はないが、横になると痛む。宿は洋室でベッドだったが、マットが柔らかく腰痛には堪えた。

藤屋旅館の外観

令和３年 11 月 19 日

鮮魚運搬船

７時過ぎに朝食を食べ、近くの漁協支所に行く。前日、朝早く鮮魚運搬船が出発すると聞いていたからだ。

ちょうど運搬船（第十八値賀漁丸）が浮桟橋に係留され、出荷の準備をしているところだった。最初に活魚が積み込まれ、続いてトロ箱に箱立された鮮魚類のパレットが２個口分、積み込まれた。漁協の職員が４人ほどで対応している。

運搬船は小値賀島の本所に行き、本所の運搬船に出荷物を移して佐世保の魚市場に向かう。この日のように荷が少ない場合は、支所の運搬船は宇久島に戻るが、荷が多い場合は直接佐世保に持っていくことになり、支所と本所のあわせて２隻で運搬することになる。

トロ箱にはヒラス、レンコダイ、ミズイカ、タチウオ、ホウボウ、アコウなどの記述が見られた。このうち、ミズイカは夜釣りで漁獲したものなので朝集荷されたが、残りの魚種は前日集荷したものを冷蔵庫に保管しておいたものだ。

運搬船には漁協の担当者が乗り込み、８時少し前に出発した。

支所の鮮魚運搬船（左）、鮮魚のトロ箱のパレットを船倉に積み込む作業（右）

神島神社と東光寺

運搬船を見送ってから、平の町中にある神島（こうじま）神社に行く。この神社は平郷の人々の産土神（うぶすなしん）である。

神社の由緒書きには、神島神社は平家盛によって 1187（文治３）年に創立され、日向（宮崎県）の鵜戸神宮の御分霊を勧請したと書かれていた。ただ宮本常一は、「この島では中世以前の歴史を物語る記録も造形物もほとんど消えてしまっているから、かりにあったとしても江戸時代に書かれたもの」だという。むしろ船の目標となった島山に神が祀られたであろうから、野崎島の北端の山の中腹に祀られている沖ノ神嶋神社の神島神を勧請して祀ったのかもしれないと述べている。

神社の鳥居は 1921（大正 10）年４月につくられたものであった。近くに記念碑が置かれている。石碑には、寶徳年間（1449～1452 年）に建立された旧鳥居は毀損し、かつ柱が低くて神輿が通らなかったため、当時皇太子であった昭和天皇の欧州巡遊（大正 10 年３月３日～９月３日）を記念して、1,500 円を募って建立したと記されていた。

神社の脇に、宇久松原遺跡の出土品である支石墓の石が置かれていた。この神社のあった一帯（砂丘）は縄文晩期末から弥生時代にかけての墓地があったところで、宇久松原遺跡と呼ばれている。この遺跡から支石墓８，甕棺 30、石棺墓５、土こう墓８が発掘され、人骨 33 体、多数の副葬品が出土している。この支石墓は朝鮮半島に源流をもつ形式で、五島列島では宇久島以外からは見つかっていないという。

神社の脇の道を海とは反対側に向かって登っていくと朱色に塗られた山門が見えてきた。東光寺である。先に訪れた寺島はこの寺の所領であったことは寺島の覚書で述べた通りである。この寺は、宇久島に上陸した平家盛が後に宇久家盛と改名、宇久覚が 1383（弘和３）年に福江島の岐宿に移るまでの約 200 年間、７代にわたって五島列島を治めた宇久家の菩提寺である。

本堂の裏には家盛以下７代（扇、太、進、競、披、実、何れも１文字の名前）の歴代領主の霊廟があるとされる。ただ、宮本常一によると、初代から７代までの戒名をほった板碑式の墓は江戸時代につくられたもの、その両側に粗末にされている苔むした五輪塔や宝篋印塔の断片の方が板碑よりも古いもので、それすらも 16 世紀までさかのぼり得るものは少ないようであるとしている。このように歴代宇久氏の墓石が粗末にされているのは、福江島に

移って五島の姓を名乗るようになり、上述したとおり子孫が熱心なキリシタン信者になったことが影響しているという。この時、仏教的色彩のものを全て破壊したためだ。こうした論考は宇久町郷土誌には触れられていない。

境内には鯨魂供養塔が建っていた。1942（昭和 17）年４月に建てられたものだ。宇久島は五島列島の他の島々と同様、江戸時代から戦前にかけて捕鯨が盛んだったからだろう。

また子どもを抱えた弘法大師像もある。道路を隔てた隣に幼稚園が置かれていた。

東光寺の山門（左）、鯨の供養塔（右）

宇久郷土資料館

東光寺の下に宇久郷土資料館がある。人が常駐しているわけではなく、観覧希望者は事前に申し込むことになっている。前日に公民館で予約し、９時に開けてもらうことになっていた。公民館の若い職員が９時ちょうどにやってきた。観光協会の人が案内してくれるという。５分ほど待つと観光協会の職員が来て、鍵をあけてくれた。

館内には宇久松原遺跡の壺や西泊中国陶磁器分散地からの出土品が展示されている。中国からの陶磁器の破片（12～15 世紀のもの）は当時の宇久氏が中国と交易し、大量の陶磁器を輸入していたことを物語るものだ。また蒙古野馬の歯の化石もあった。１頭分の歯がほぼ完全に揃っているのは珍しいそうだ。

これらの遺跡とは別に、農業や漁業に使われた古い道具が収集、展示されている。特にアワビ採取に使われた海士の道具、眼鏡、空気袋、起こし金、腰縄、滑車、分銅などは貴重なものとして興味をもった。潜水時間をできるだけ長く確保するために革製の空気袋が使われていたことは初めて知った。

この資料館は近々展示品を拡充し、新たに整備する予定だという。

資料館の隣に石垣が積まれた敷地があり、「館の跡」と書かれた立て札があった。宇久氏７代が住んだ場所と書いてあったが、真偽のほどは定かではない。さらにその先に武家屋敷跡（五島藩代官所跡）がある。敷地は 1.5mほどの石垣で囲まれ、入り口は途中で直角に曲がる。

坂を登って県道 160 号を渡った先は、宇久小学校、宇久中学校、公民館、長崎県立宇久高校などがかたまった文教地区である。社会福祉協会の前には「久保様の墓」というのがあった。何でも平家盛が宇久島に上陸した時に、抵抗した久保一族を殺害したそうで、その供養のために後の代が葬った場所だという。近くには真言宗の毘沙門寺もあった。

宇久島資料館の建物（左）、アワビ採取に使った眼鏡（右）

小浜郷

針木から野方に抜け、再び南下して太田江の集落を経て、平漁港の南の外れに整備されていたフィッシャリーナを見に行く。フィッシャリーナは、海洋性レクリエーションが盛んだった 1990 年代に、増加するプレジャーボートを受け入れ利用調整を図ることによって、不法係留の防止を狙った水産庁漁港部の事業である。

フィッシャリーナ宇久はビジター専用のバースで、38 隻の収容が可能である。この日係留されていたプレジャーボートは、モーターボート２隻、船外機２隻だけでヨットはなかった。ブームが去って世の中が変わり、施設は遊休化している。

続いて小浜漁港に向かう。同漁港は蒲浦と下山の２つの地区に分かれている。

最初に蒲浦地区に行った。漁港の前面に大きな防波堤がつくられている。「ハ」の字をした防波堤の内側には漁船が８隻係留され、何れもトローリング用の竿を装備している。うち２隻はイカ釣もできるようで集魚灯がぶら下がっていた。漁港の背後には集落が形成されているが、空き家が目立つ。家がすでに撤去されて、草が生えないようにコンクリートを塗布した更地もあった。漁港を見下ろす高台にはこの集落の墓が並んでいた。

続いて小浜郷下山に行く。漁港入口の小さな川沿いにアコウの大木が天を突く。この木は佐世保市の天然記念物に指定されている。漁港内には漁船８隻とプレジャーボート１隻が係留されていた。漁港の背後には下山の集落が形成されているが、やはり空き家が目立つ。漁港の先端に金刀毘羅神社があり、神社の鳥居は 1938（昭和 13）年につくられたものだった。

神社の近くに停泊している漁船に漁師がいたので話を聞く。77 歳になる後期高齢者で、これまでに脳梗塞を５回やって頭が悪くなり、機関の直し方がよくわからなくなったとぼやいていた。彼はもともと半農半漁を生業としていたが、40 歳を過ぎてから漁業専業となった。以前は大きな漁船を所有し、ヨコワ釣り、水イカ釣り、ヒラマサの曳釣り、ケンサキイカ釣り、クエ延縄など網以外の仕事は何でもやったという。曳釣りの餌は魚探で反応のあるところにサビキをおろしてアジやイワシを釣り、これを活餌にしてブリやヒラマサを釣ったそうだ。年をとって船を小さくしてからは遠くまで出かけるヨコワ釣りはしていないという。

下山の集落はもともと半農半漁で暮らしを立てていたが、農業では食べていけなくなり、

漁業に専業化したようだ。しかしその漁業も資源が減り、厳しい状態が続いている。最近、島周辺に回遊魚が来なくなり、福岡方面に釣りに行く人が多くなった。一時増えたアカハタは今年は減少し、また海藻はなくなり沖縄の海のようになっているという。

小浜漁港蒲浦地区の漁港内（左）、小浜漁港下山地区の漁港内（右）

神浦郷

続いて神浦郷に行く。ここは富江藩の中心地で、代官所があった。明治維新後に神浦村になると、役場がこの地に置かれた。つまり平郷と並ぶ宇久島の中心地だったのである。しかし交通の玄関口が平に移り、平郷への一極集中が進むにつれて神浦は寂れてしまった。

神浦は天然の良港であったことから古くは遣唐使船の風待ち、潮待ちの港として外に開かれていた。江戸時代には商人の町として栄え、廻船業が発達する。江戸時代初期から湾奥を埋め立て、家屋が建てられ、街がつくられていった。

一方、島の周辺は好漁場だったことから、大坂の岸和田や泉佐野あるいは周防大島などから漁師がやってきて、レンコダイやアマダイなどの延縄漁でにぎわった。延縄の技術は瀬戸内海の漁師から伝えられたものだったのである。その後、明治、大正、昭和と西日本各地から漁船がやって来て、神浦は漁業の根拠地として栄華を極めた。

しかし、昭和 30 年代以降は以西底曳網などの発展によって沿岸漁業は急速に衰退する。代わって住民の多くは遠洋漁業などに従事するが、その遠洋漁業も衰退し、神浦は産業的基盤を失い、寒村になって現在に至る。

神浦漁港と背後の集落（左）、廃校になった旧神浦小学校（右）

神浦郷の高台に宇久島神社があるが、この神社には狛犬の他に牛の像が一対置かれてお

り、珍しい。近くに妙覚寺という寺もある。神浦漁港には厳島神社と金刀毘羅神社が並んで置かれている。両神社は江戸時代の創建なので、瀬戸内海方面から渡って来た人たちがつくったにちがいない。

神浦には神浦小学校と神浦中学校が置かれていた。小学校は 1960（昭和 35）年の 421 人をピークに児童数は減少の一途を辿り、2015（平成 27）年度で閉校となり、平郷の宇久島小学校に統合された。中学校は 1966（昭和 41）年の生徒数 424 人をピークにその後減少、2004（平成 16）年度で閉校となり、宇久島中学校と統合されている。

風力発電

「宇久島に風力発電はいらない　風力発電建設絶対反対」と書かれた立看板を島のところどころで見かけた。「宇久若いもんを支援する会」が立てたものである。10 年前に宇久島に来た時は上述したように火焚岬に破損した風力発電の風車が残っており、島内のいたる所に反対のビラが貼ってあったが、その当時に比べると運動は下火になっているように思われ、立看も古びてきている。

しかし、フェリーターミナル前のメインストリートには日本風力発電㈱の現地事務所があることから、風力発電施設の建設が白紙になったわけではないようだ。一方、これとは別にメガソーラーの計画が持ち上がっているようで、こちらも密かに潜行している様子である。なお、風力発電もメガソーラーも陸上設置型だ。

かつて宇久島の経済を支えていた水産業は年々衰退してきた。その後の出稼ぎ先だった遠洋漁業も海運業も衰退した。一方、農業は肉牛の繁殖が唯一で、子牛の高値相場に支えられているものの、いつ暴落するかわからない脆弱性を抱えている。

島の経済の不振は宇久島の過疎化に一層拍車をかけるだろう。このままでは地域社会の崩壊は目に見ていることから、脱炭素社会の切り札である再生可能エネルギーの誘致に活路を見出したいという動きは十分に理解できる。

しかし、高齢者の多くは、島に風車が林立し、メガソーラーのパネルで地表が覆われてしまうことに違和感を持ち、「故郷が故郷でなくなる」と大いなる危惧を抱き、感情的に容認できないのである。

「成長」を前提とする社会から「脱成長」の社会へとパラダイムシフトが起こらない限り、島は再生可能エネルギー基地として生き残ることを選択せざるを得ないだろう。

風力発電の建設に反対する立看（左）、日本風力発電㈱の現地事務所（右）

オリーブと柑橘

神浦郷から旧神浦中学校の跡地を見て北上し、大久保郷に向かう。途中、鳥山・岩本牧場と書かれた大きな牛舎があった。大久保の地名は家盛の家来であった大窪氏が封じられた土地であることに由来する。この集落には鹿神社という風変わりな名前の神社があり、拝殿の前には１対の島の像が置かれていた。

神社の角を北上すると、海に出た。海の見える丘陵地帯は牧場になっており、10 頭ほどの牛が草を食んでいた。牧場から木場郷に入り、160 号沿いにある浄土宗の厳浄寺を覗く。

城ケ岳の山麓を南下すると小さなダムが現れた。ダムサイトを渡った先にオリーブの木が植えられている。まだ幼木で収穫には時間がかかりそうだ。坂を下っていくと、「オリーブ振興協議会」と書かれた看板のある建物があり、その脇にオリーブが植わっていたがこちらはダムサイトの物よりも大きい。島の農業の多様化を進めるためにオリーブに白羽の矢が立ったのだろうが、普及にはほど遠い状況と見受けられた。

ついで総合運動公園を見に行った。アンツーカーのある 400mのトラックを備えた本格的な陸上競技場と野球場もある。人口 2,000 人の島でどれほどの需要があるのかわからないが、立派すぎる施設といえよう。

総合運動公園の１本西側の山道を走ると、林に囲まれた柑橘類の畑があり、実がたわわになっていた。中に入れなかったので具体的な種類はわからない。宇久島では 1970（昭和 45）年ごろに福原オレンジを導入し、最盛期には 50 戸ほどの農家に普及したが、その後衰退しているからその当時の名残かもしれない。

オリーブにしろ、柑橘類にしろ、島の農業を活性化する決定打になっていないのが現状だ。

木場の放牧場（左）、オリーブ振興協議会の事務所とオリーブの木（右）

ターミナル前のガソリンスタンドで給油し、満タン証明をもらう。証明書を車に置き、キーとつけたまま、ターミナル前に駐車した。後でレンタカー会社の人が取りに来ることになっている。港の前の「あかちょうちん」という店に入り、昼食（ちゃんぽん）を食べる。

13 時 50 分発の「太古」に乗船、福岡港に向かう。自衛隊員が多数乗り込んでいた。相変わらず腰が痛いため、座敷で寝るのはやめ、椅子に腰かけてパソコンにメモを打ち込む。

【文献】

宮本常一（2015）：２．宇久島、私の日本地図５　五島列島．未來社．東京．25-59.

宇久町郷土誌編纂委員会（2003）：宇久町郷土史．宇久町役場宇久町教育委員会．pp. 835.